

目の前の石田は、俺の言葉を受けて喉を強く、ゆっくりと鳴らす。

「異論はない」
宗谷も納得していたようではあつたが、改めて肝に銘じただろう。
しかし鈴懸だけは険しい顔を見せる。

「不満があるなら今言え」

「不満があるなら今言え」「分かってる。引つかかってるのは、リーダーに従うつて部分についてだ。俺は負けると思っちゃいないが、俺についてくる連中の動きは知つておきたい。主義主張が異なるリーダーを相手に妄信的に従えつてことか？　もしそうなら、俺は引き受けるつもりはない」「全てに対しイエスだけを求めるなら天才など不要だ。ましておまえたちのような変わ者の3人を1つにするメリットなどどこにもない。リーダーに最終決定権は与えるが、育方針に異論があれば徹底した議論を行つてもらう。そのための田淵たぶちでもあるからな

「与党と野党みたいなものですね」

感心したように、鴨川が政治家らしい

「……理解しました」

石田も落ち着きを取り戻しがちで、さすが、最善の選択だろう。

計画に遅れは出るが今はこれが最高の手段となり、1期生のみ3年かけ3つのグループで育成し、その後リーダーを決めて統一。

金はかかるし効率も落ちるが、教育者をまとめるためには必要な措置。新たな教育方針を作り年1単位で新しい期生の育成をスタートさせていく。途中で様々なプラン修正も強いられるだろうが、これが今取れるベストな選択だ。

○奔走

大物政治家からの鶴の一声であっても、物事は簡単に進んだりはしない。
人材育成計画はまだ構想段階でしかなく、資金の調達においても全てはこれから始める
ものであり、いわば白紙に近い状態からのスタートだ。
絶対に外せない枠組みである『乳幼児からの育成』以外は如何様にも変化する。
柔軟に変化させ対応していく必要があるだろう。

「……厄介なプロジェクトになりそうだ」

俺は取つ散らかった書類だらけの机に両足を乗せ、資料と睨み合いを続けていた。
切り込み方を1つ誤ればこのプロジェクトは評価されるどころか一気に顰蹙を買う。
子供を利用しようとしている、ではなく子供を救済するための施設。

その印象を多くの国民に持たせなければならない。
が、それはあくまでもプロジェクトが実際にスタートすることになつてからの話。
今はその前段階として、実験台となる子供と膨大にかかる予算を集めることからだ。
それに子供を確保するための手段も必要か。

俺は暗記している11桁の番号を、手で入力して電話をかける。
「俺だ。大場に変わってくれ、新しい仕事を頼みたい」

まずは使える駒を使って善悪問わずアプローチする方法を考えねばな。
それから電話の向こうで大場が出た後、俺は新生児を手に入れるための方法を模索して
いることを伝え、どうするべきか教えを乞う。
だが大場に連絡をした時点で、悪の手段になることは避けられないことだがな。

話の最中、ブザーのようなチャイム音が鳴る。

「すまんがまた連絡する」

俺は大場との話し合いを途中で終わらせ、来客に対応することにした。

「おはようございます。鴨川です。綾小路さんいますか？」

「勝手に入れ。鍵はかけていない」

「お邪魔しま……す」

都心近くながら家賃10万円ほどのボロ事務所、その片隅に鴨川が憂鬱げな顔を見せた。

「うわ」

扉を開くなり、鴨川が露骨に失礼な態度を見せる。

だがいちいちこちらから突つ込むようなことはしない、来客に共通する反応だ。

「綾小路さんってもしかしてこの事務所で生活してます？ ちょっと生活臭が……」
足元に転がった缶ビールやくたびれたソファーの上のしばらく洗っていないシーツ。乱
雑に脱ぎ捨てられた衣類を見れば子供にも想像は容易だろう。

「それがどうした」

「いえ、どうしたってわけではないんですが……うしくないというか……」

「議員の年収に見合わない、か？」

「議員の年収に見合わない、か？」
国会議員の月給は100万を軽く超えている。ボーナスもそれに準じ、それらも合わせ
れば2000万以上。そして様々な名目で手当ても与えられる。
「僕の3つ上の木更津さんなんて議員になつた翌週に都心のタワマン最上階契約したつて
自慢してましたし。普通だつたら通らないようなローン審査も、一発だそうです」

「国会議員だから通つたわけじゃない」

「え？」

「確かに国会議員の年収は一般企業の観点から見れば高い。だが、衆議院議員にしろ参議
院議員にしろ、数年に1度選挙で当落を強制される。そんな不安定な職に対し肩書きだけ
で無条件に高い金を銀行が貸し付けるわけないだろ」

「でも、木更津さんは通つたって……」

「融資金額、どこのバンクであるか、そしてコネクション。通すための条件は他に幾らで
も用意できる」

「そ、そういうことですか……僕じや通らないですね……」

「それは逆だろ。確かに目の前の鴨川自身は木更津よりも単体の評価は低いが、銀行は

その父親である鴨川俊三のことまで透かして見る。
その父親である鴨川俊三のことまで透かして見る。
その父親である鴨川俊三のことまで透かして見る。
その父親である鴨川俊三のことまで透かして見る。

融資先を探していると聞けば、何行もの銀行職員がこぞつて鴨川に会いに来るだろ。

それこそ菓子折りの1つや2つ持参して。

「くだらんな」

「くだらない、ですか？ 高級タワーマンションに住むのは誰しも憧れません？」
「鴨川。おまえのためを思つて言つておく、木更津のような有象無象の真似はするな」

「何も不動産を買うなど言つてるわけじゃない。だがその適切なタイミングを見誤るなど
言つていいだけだ。金は有限だが、そこには無限の可能性がある」「なるほど……」

よくわかつていな鴨川が、それとなく分かつたような口ぶりで頷く。

「え？ 1億ですか？ 9000万くらい貯金して、1000万はパーツと使います。キ

ヤバクラ行つたり車買つたり。ちょっと株式に回してもいいかも知れないです。キ
らいあればマンションも買うんですけどねえ」

「使い方、綾小路さんは違うつてことですよね？ どうするんですか」「え～？
自分で考えろ」

「え～？ 教えてくださいよお～」

1億。それだけの金が湧いて来れば俺は数日のうちに全てを使い切るだろう。

財界と繋がるための手段として買収や賄賂、将来への投資方法は様々に広がっている。
小銭すら惜しい時に事務所や自宅に金をかけている暇はない。

先行投資した1億は、数年後数十年後に桁違いの金に化けて返つてくれればいい。
そしてそこに、終着駅であるこの国最大の権力者の肩書きもついてくるなら完璧だ。

「それで、ここに何しに来た」

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「何しに何しに何しに来た」

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「何しに何しに何しに来た」

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「何しに何しに何しに来た」

「何しに何しに何しに来た」
直江先生の言いつけ通り綾小路さんのお手伝いですか。

「なら、望み通り役立つてもらおうか。おまえに仕事をやる」

「これまでろくな役割を与えたされた経験のない鴨川は目を輝かせる。

「これまでろくな役割を与えたされた経験のない鴨川は目を輝かせる。

「どんな仕事ですか？」

「例のプロジェクトには実験施設の確保が必要不可欠だ。おまえにはその場所の選定を任せることに」

「規模、予算、そして人目を避けられるかどうか。それが上手く行けば次の仕事をやせる。規模、予算、そして人目を避けられるかどうか。それが上手く行けば次の仕事をやせる。おまえも直江先生に認められるような立派な議員になりたいだろ？」

「おまえも直江先生に認められるよう立派な議員になりたいだろ？」

「な、なるほど。確かにそれは避けては通れないことですもんね」

「高育の規模には及ばずとも、子供たちは年単位で増やす。となれば、相応の広さは当然求められる。更に匿名性が保てるかも重要だろ？」

このプロジェクトは大々的な宣伝を打つことが出来ないからな。

乳幼児に対する危険な教育、などと新聞記者に書き立てられるわけにはいかない。

「予算の観点から見ても、必然的に田舎の方になりそうですね」

ずっと間抜けな顔をしていた鴨川の顔つきが変わる。

ぬるま湯につかり続いている男だが、けして2世と呼ばれることに喜びを感じているわけではない。適切な仕事を与え適切に讃美言葉を与える程度使い物になるかも知れないな。いや、そうであつてもらわなければ困る。

「分かりました。やつてみます」

「それでいい。今までで一番マシな顔になつたな」

「そ、そうですか？」

「少し褒めると、すぐにそのマシな顔は引っ込んでしまったが。

「綾小路さんはこれから何を？」

「施設を用意するためには何より金が必要不可欠だ。俺はそのための準備を始める」
こちらの想定する条件を当てはめて行けば立ち上げ初期に必要な金額だけでも相当な額
が必要になるだろう。

更に人材の確保などを計算に入れていけば5億は用意したいところだ。

安全を買うなら6億、7億以上が求められるが……。

「このプロジェクトのことを話して出資してもらうつてことですよね？」

「もちろんそれが狙いだ」

「子供に英才教育を施せるんですから、喜んでくれるのでは？」

本当にこいつは先が見えていないようだ。

まだ構想段階、数枚の紙切れでのプロジェクトに誰が出資するというのか。

そもそも資産家たちと一口に言つても、簡単に出してくれるような金額ではない。

無論政治家として表向き献金を受け取ることは出来ないため、あくまでも後援会などの
団体に献金するという手順を踏む必要もあるだろう。

献金には上限額なども存在するが、そんなものを律義に守つている政治家を探す方が難
しい。献金を迂回させる方法、その抜け道など幾らでも存在する。

なおえ
直江先生が『やる』と言えば大金が

卷之三

だが、こんな紙切れの上でのことでも、たゞ、
大口の出資者を見つけることが急務だ。
だが、こんな紙切れの上でのことでも、たゞ、
大口の出資者を見つけることが急務だ。
だが、こんな紙切れの上でのことでも、たゞ、
大口の出資者を見つけることが急務だ。

やはり最初の出資するのな

それが何とか、おのづかずの求心力はなくとも、一二も無い話じやないだらう。先はいから3冊の通帳を取

り出す。地銀を含めたら、一
り一万弱か

「全部で……1000万弱か」

心もとない軍資金だか これで二三

1

みなとくしろかね
港区白金の中にある、高級住宅街。
そこには、さびえたつ歴史ある屋敷が姿を見せた。

その一角に、ひと際大きくそびえたてて居る。外觀からは古さをそれほど感じさせないが、何度も金をかけ改築を繰り返しているのだろう。

い。一介の政治家などでは到底住むことは叶わない。玄関先には複数台の監視カメラが設置されており、物々しい雰囲気も感じられる。坂柳と書かれた立派な表札を横目で確認してからチャイムを押すと、最初に出てきたの

はこの屋敷の使用人と思われる初老の男。

アポイントは入れてあるため、俺はすんなりと門をくぐることを許された。

広々とした、い草の香りがする畳に傷んでいる様子はない。

定期的に張り替えているのかこの辺にまで金がかけられていることが一目でわかる。

更に奥に進むと洋室が姿を見せ、ソファに座つて待つよう伝えられた。

これから会う相手に対し、どのような態度で出るべきかは考えてきている。

俺は堂々と、遠慮なくソファーに深々と座つて待つことを選択。

直江先生の傍^{そば}で働く人間として、そして将来を見据えたプロジェクトを抱えた

なりもり

さく見せる気はない。

やがて運ばれてきた茶の湯気を見つめていると、待ち人が現れる。坂柳成守^{なりもり}だ

「お待たせしました」

瞬時に感じ取つた第一印象は、線の細い華奢^{きやしゃ}な男。

声も大人しく金持ちに多い傲慢な態度は見て取れなかつた。

「初めまして。私、綾小路^{あやのこうじ}と申します。お忙しい中お時間を作つていただきありがとうございます」

態度は堂々としつつも、最低限の礼儀はわきまえる。

あくまでも邪魔している側であり、願い出る立場である事実は変わらない。

「坂柳です。直江先生から綾小路先生のことは何度か耳にしております」

「悪評でなければ良いのですが」

「とんでもない。大変優秀な方だと話されていましたよ。しかも僕と同い年だと聞いて、なんとも恥ずかしい気持ちを覚えました」

生まれた時から勝ち組のレールを歩くこの男にとつて下々のことなどどうでもいいはずだが。単なる謙遜だとすれば、それなりに嘘は上手いと褒めておこう。まずは坂柳の人間性、その真贋を確かめることから始める。

「いえ、僕などまだまだです。父が凄かつただけで、本当にそれだけです」

こちらの世辞に対しては乗つてくることもなく困ったように苦笑いを浮かべた。

かつた。会話を切り上げたがるような素振りも見せないため、ここはこちらから踏み込ん

だ方が良さそうだ。

「こうしてお邪魔させていただいたのは、困りごとがあれば坂柳さんを頼れ、と直江先生

が仰つていたのを思い出したからです。恥を忍んでお願ひに上がつた次第です」

金持ちは、このような話の切り出し方を基本的に歓迎はしない。

生活が苦しい、投資したいが元手がない、事業を起こしたい。それらは金に起因する。

「どのようなご用件でしょう」

警戒しているように見えないが、僅かに坂柳の顔つきが変わった。

「今、私はあるプロジェクトを立ち上げようと思つております。しかし、そのプロジェクトを進めていくためには膨大な資金が必要になる」

「なるほど。それで僕にどんな困りごと……いえ、お願ひに来たんでしょうか」
「初対面である坂柳さんに金を出せ、と言いたいわけではありません。しかしながらそれ

に近いことをお願ひしたいのです。あなたには、私と財界とのパイプ役になつて頂きたい」

俺は独自に用意した新しい資料をクリアファイルから取り出し、それを提示する。

俺は独自に用意した新しい資料をクリアファイルから取り出し、それを提示する。

それに手を伸ばさず、坂柳はこちらの目を見続けていた。

表情こそ感じ取らせなかつたがやはり警戒しているだろう。

いや、していなければならない。

名前だけは聞き及んでいたとしても、坂柳にとつて俺は見ず知らずの男。

政治家の肩書きも、世間に認知されているわけでもない。

となれば当然、安易に目を通すようなことはしないだろう。

知つてしまえば、かかわつてしまえば厄介なことになるのが金持ちの定め。

「なるほど。僕に出資金を希望するのではない、と」

「はい。いきなり押しかけて金を寄せよこさすがとは流石に言えません。無論、プロジェクトに賛同していただけるのであればその限りではありませんが。重要なのは頭を下げて金を出し

てもらうことではなく、納得した上で多くの方々に出資していただくこと」

だが、そのプレゼンの機会すらないのでは机上の空論で終わってしまう。
 「このプロジェクトを発足させ、1人でも多くの子供の命を救い、そして正しい教育を受けさせたい。そんな施設を用意できないかと考えております。私はあなたの父上が実現させた高度育成高等学校に強く感銘を受けた1人なんです」

子供、教育、命。

これらのワードが坂柳に刺さるのは必然だろう。

この男の父は高育こういくを任される、まさに子供たちを導く指導者なのだ。

ここで目すら通さないなどという甘つたれた抜け道など許さない。

「ならば、僕ではなく父に相談するのも1つの手ではないでしょうか」

「確かに筋道としてはそれが正しいかも知れません。が、政治の世界はそう単純ではありません。高度育成高等学校の存在を世に広めたのは鬼島きじま先生です。あなたの父上はその鬼島先生とも深い繋がりを持たれているでしょう。であれば鬼島先生のライバルである直江なおえ派閥の私が、どうして相談を持ち掛けられるでしょうか」

「僕が鬼島先生と懇意にしている可能性もあるとは考えませんでしたか?」

「もちろん可能性はあるでしょう。しかし、そういう話は一度も耳にしていない。それならば、そこに賭けてみようと思つただけです」

俺の話には嘘うそも混ざつていて、真実が大半だ。この男の父親が話の分かる権力者だとしても鬼島派閥である以上、こちらの企画を教えるわけにはいかない。

「率直にお聞きしますが、鬼島先生にこの情報が洩れることは絶対に避けたいと考えて
る。ということですよね？」

「否定はしません」

「であれば、少し腑に落ちません。僕が鬼島先生側なのか直江先生側なのか、あるいは立
立なのか。そのことを綾小路先生はご理解されていない。なのに、このような話を聞
て構わないのですか？ その資料に目を通せば情報を得てしまう。誰に話すか分か
のではないと思います」

「確かにそうですね。かといって数分話しただけの相手が、信用できると感じたから
などと言つたところでうすら寒いことになるだけでしょう」

坂柳は隠すことなく頷く。

「しかし、私も政治家の端くれとして信条としていることがある。それは直江先生のこ
とを全面的に信頼しているということです。直江先生は言葉の重みをよく知つてゐる。も
うなが鬼島先生や自らの父上にこの話を洩らすような人間であつたなら、直江先生が
「……信頼しているんですね、直江先生を」

「政治家の多くは遠からずどこかの派閥に入る。どんな派閥にせよ、特定の誰かを支持す
ると決めた以上は最後まで信じ抜くだけ。そこに一片の迷いも入れてはならないと考
えています」

「なるほど。直江先生があなたを傍に置くわけですね」

直江え

「嬉しそうに坂柳はそう口にして、少しだけ深く腰をかけ直した。

先生と繋がりを持つていてることを、不思議には思いませんでしたか？」

「無論、疑問に感じていらないわけではありません」

「僕は父を尊敬していますが、同時に目標だと捉えています。同じ道を辿るのか違う道を

辿るのかは分かりませんが、少なくとも様々な可能性を模索したい。だからこそ、僕はあ

このことは父も反対せず、むしろ黙って応援してくれています」

「敵であつても見聞を広めることに賛同するとは、懐が深いようですね。そしてそれと同

時にあなたの口が堅いことに對し信頼を置いているようだ」

この男のような立場であれば、基本的に父親の跡を継いでいくケースばかりだ。

敵対組織と関係を持つことになれば、相手の情報を得る機会を得ると同時に相手に情報

を渡してしまうリスクも抱える。

だが、直江先生にも気に入られていることが見て取れるように、坂柳は信頼を勝ち得て

いるのは事実だろう。

「なればこそ、より確信に変わった。是非あなたに目を通して頂きたい」

「用件次第ではすぐに引き取りをお願いするつもりでしたが、そもそもいかなくなつてしま

まいましたね。綾小路先生の気迫と信念、確かに受け止めさせていただきました。拝見します

ついに坂柳が資料を手に取り、目を通す。

つぶやく。

それを一通り読み終えた後、深く考えることもなく坂柳は呟く。

「確かに日本では年間数百人の子供たちが捨てられています。その現実を受け入れてい

わけではありませんし、政治家の方が何とかしようとすることは悪いことではない。む

ろ歓迎すべきことでしょう

「共感していただけるということですね？」

「もちろん共感はします。しかし、これはまさに政府が議題として取り上げるべき問題

あつて、僕のような民間人には……失礼な言い方ですが関係のないことでは？ 綾小路

生には是非この問題を取り上げていただき、対策に取り組んでいただければと思います」

「それが出来るのならそうします。しかし国のシステムはそう単純じやない。捨てられ

子供は未だに無くならない。母子家庭父子家庭、貧困世帯などでは未だ求める教育を受

られない子供たちも存在し、貧困の連鎖は止まる気配を見せず格差社会は広がり続けて

る。違いますか？」

「……そうですね」

「テレビを御覧になつていれば分かるでしょう。駅などのトイレで密かに出产し闇に葬ら

なければならぬ母親。けして珍しい話じやない。法の整備もろくに出来ていない現状と

世間の目を気にして子の命を絶つ母娘の気持ちはさぞ無念だろうと。無論、望まないに冷酷になれる者もいるだろうが、みな進んで犯罪者になりたいわけではない。堂々けられる手厚い場が用意されていれば悲しむ者は最小限に抑えられる」

この企画が実現すれば、10人20人、やがては100人を超える子供たちの命を救うが実現できる。いや、それ以上に膨れ上がっていくだろう。

「政治家になつて、なんでも思い通りに行くわけじゃないことは、こちら側に近い法律の制定、予算の決定、条例の制定だというが、実権を握っている者たちが私利私ために動く一方で、若輩の政治家に誰も耳など傾けない。それとも私が……いや、生年30年と政治家として一流になり発言権を得るまで、子供の命を見捨て続けると？」

「そのことを強く刷り込んでいく。

「しかし……それでも緩小路先生は議員です。国と向き合い国と戦うべき人だ。そし国としてこれを議題に取り上げず、どう進めるおつもりですか？」

「我々は政治家であり公務員ですが、特別職です。特別職は副業が許される。すつもりはありませんが、如何様にも動きようがあるということです」

「個人で子供を救う仕事をされる、と？」

「直江先生に目を掛けていただいている今、そして政治家として歩み始めた今なら、

の方も私の声に耳を傾けてくれるのではないかと考えています。だからこそ、坂柳さんに

「確かに普通の方と違い、政治家というだけで周囲の目の色は変わります。この企画に書

かれてあるものが実現するのなら、手を挙げてくれる人もいるかも知れませんが……」

偉大な父親の2世であるこの男は、少なくとも鴨川などより遙かに出来る。

お人よしな一面を見せつつも、安直な回答を出そうとはしない。

「基金を募る方法もあります。綾小路先生が仰ったように副業が許されていますよね？」

ネットで発信すれば国内だけでなく世界に向けてアピールすることも可能です」

「国の法が追い付いていない現状を訴えろと？ そんなことを世界に向けて発信する。私ではなく直江先生の顔に泥を塗ることになります。これはあくまで、現段階では極秘裏に進める必要がある案件です。だからこそ財界の方々の力が必要なんです。お力を貸していただけないでしょうか」

「……紹介すること自体は構いません。が——本当にうまくいくかは別問題ですよ。綺麗事ばかりが並べられていても、人々は喜ばない。むしろ警戒するでしょう」

「では、どうすれば良いと考えますか」

「嘘をつかないことです。綾小路先生の考え、目的をすべて曝け出すこと」

「それが出来れば苦労しない。

「難しいことなのは分かります。しかしお金儲けを一切考えません、子供が救えればそれ

で十分です。手柄を欲しているわけでもありません。そんな人を先生は信じますか?」

確かに、俺の目の前にそんな存在が現れれば鼻で笑い飛ばすだろう。
 「地位と名譽が欲しい、お金を儲けたい。だから子供を救う。明け透けもない話ですが、
 そう伝えてもらえた方が相手は信じてくれると僕は思います。まして綾小路先生は議員で
 す。より高みを目指すための土台だと知れば、いずれ先生が大物になつた時に大きな見返
 りが得られると考える方も出てくるのではないでしようか」

「……確かに」

「もちろん、私利私欲が一切ない方が子供たちのためにはなりますし、それが理想である
 ことは揺るぎませんが。綾小路先生は何を求め、この企画を立ち上げようとしているので
 すか?」

「——地位や名譽、金。確かにいざれは欲しいもの、欠かせないものです」

この男の言うようにそれは絶対に必要だ。

しかし、俺がこのプロジェクトに关心を寄せたのには大きな理由がある。

「今までは、日本は世界と戦えない。だが、自然と戦える人材が育つのを見つめてい
 るだけではいつまでたつてもグローバルな世界に追いつくことは出来ない。だからこそ、
 子供たちに徹底した教育を施し、世界と戦えるだけの人材を、天才を育て上げたい。そう
 考えています。命を救うだけじゃない。その命をこの世界において価値の高いものに変え
 たい、それが私の本当の目的だ」

強制的な命の救済と教育。この事実は世間には受け入れがたい事実にもなる。

「子の教育は親に一任されています。その親が不在な子供たちなら、綾小路先生の理想のために育て、教育することが可能だと考えたわけですね」

「私のためじゃない。日本の未来のためだ」

戦後、バブルを経て大きくなつた日本は消え去り、今はただ落ちていくばかり。既に発展途上国の中間入りと揶揄されている現状に終止符を打たなければならぬ。「年寄りばかりの政治家を見てあなたはどう思いますか。70、80を超えた老人たちにを思う本当の気持ちがあるとでも？」彼らにしてみれば生きている間さえどうにかないい。50年100年先のことなど微塵も考えていない。俺とて、いざれはそんな間違考え方には變わるかもしれない。しかし今は違う。今、若者の代表として未来を憂い未救いたいと思つてゐる。だからこそ一刻も早く行動に移さねばならない

気が付けば、俺は1人熱く語つていた。

この男の抜け目のない思考に惑わされたのか、あるいは政治家としての本能が疼いたか。

「このことを直江先生はご存じなんですね？」

「いえ。これは全て、俺個人の考えです」

ここでイエスと答えるわけにはいかない。

だが、坂柳は分かっているようで、俺の目を見てから一度頷いた。

「僕の父、そして僕の考える教育理念と綾小路先生の理念は大きく違うようです。ですが、
しいのかを判断する重要なケースでもある。今、僕が直江先生の近くに立つてのことと
状況は非常に似ています」

この男の父親は、高度育成高等学校を任せている。
新しい試みの1つであることは確かだ。

しかし坂柳の言うように、俺の方針とは大きく異なるな。

「望み通り、ご紹介しよう。しかし1つだけ条件を与えます」

「この企画が実際に実現する時、僕にも傍で綾小路先生のやり方を見届けさせてください」

「その程度のこといいんですか」

「僕にとつてはそれがとても大切なんです。多くを学ばせていただきますよ」
「お約束します。施設が実際に作られれば、坂柳さんには自由に出入りしていただいて構
いません。成果を見届けて頂けるなら言うことはない」

財界とのパイプが作れるのなら安いものだろう。

それに俺としても、高度育成高等学校の仕組みなど気になることも少なくない。
直江先生のライバルである鬼島先生の情報も、何か探れるかも知れないしな。

味方であれ敵であれ、情報は力だ。

ただ、こうもすんなりと行くものだらうか。

目の前の男は終始にこやかに、否定的な意見を交えつつもまるで最初から味方的な態度を示している。

何か裏がある可能性はないか？

直江先生からの薦めだからといって、別の人間の息がかかっていない保証はなし、やろうとしていることがこの男から漏れてしまえば――。金を工面するために急いだとはいえ、少し踏み込みすぎたか。

事前にこの男に関する調査をしていると言つても、今回は時間がなくいつもよきなかつた。鵜呑みにするのは危険だが……。

だがこれくらいのリスク、繰り返しディールしていくくらいの覚悟は必要だ。「よろしければ近々お食事でもどうですか。高育こういくについても是非詳しく述べたいし」「僕も綾小路先生から、今回の企画に加え政治のお話を聞かせて頂きたいと思つてころです。お付き合いさせていただきますよ」

食事の誘いなど、単なる浅い関係をそれらしく見せるための儀式。
さあ、第二ラウンドといこうか。

「目が覚めると、薄汚い天井のシミがぐわんぐわんと揺れ動いて見えた。

「流石に連日飲みすぎたか……」

鍵がかかっていなことに気づいたのか、来訪者は遠慮なく上がり込んでくる。

「2週間ほど音沙汰の無かつた鴨川が、息も絶え絶えに事務所を訪ねて來た。

「綾小路さん起きてください！」

見つかりましたよ、理想的な場所が！」

寝不足も相まって、俺には拡声器で叫ばれているように感じる。

「耳鳴りがする中で仕方なく身体を起こし、俺は鴨川からの報告書類を受けとった。

「随分お酒臭いですね。羨ましいなあ、どこで美味しいもの食べてきたんですか？」

「酒を飲むのも仕事であつて苦行の連續だ、これを楽しいと思う神経はない」

安酒で姉ちゃんたちと飲んでいると考へてゐるのなら、甘い話だ。

政治家になつても偉そうな態度など取れず、目上の者たちに対し頭を下げお酌を繰り返す作業。それはサラリーマンたちの日常と何も変わらない。

「喜び勇んで報告してきた鴨川の書類は、企画の舞台となる物件の資料。

「埼玉か。確かおまえの地元だつたな」

地価の高い東京では非現実的だと思つていたため、特に驚きはない。

「はい。山奥にかつて製薬会社の工場があつたんですが、今から数十年前に公害問題が取り沙汰されて以降売上を落とし、数年前に会社は倒産。工場は取り壊されることなく今も残り続けていました。敷地面積は大きすぎず小さすぎず、プロジェクトを遂行する上で理想的な場所かと」

資料を机に置いて、パソコンで地図を表示し具体的な場所を確認する。資料を机に置いて、パソコンで地図を表示し具体的な場所を確認する。今の時代、どこにいてもリアルタイムで欲しい情報を手に入れる出来るのはありがたい限りだ。

最寄り駅からは1時間以上で周辺にはバスも通っていないような、理想的な場所だ。賃借した場合と購入した場合、両方の価格も載っている。多少割高にはなるが、賃貸契約をして数年後に購入に切り替える選択も出来るようだ。

まあ、この辺は交渉次第で色々と期間や金額は変動させられるだろう。「しかし240万とは足元を見られているんじゃないのか？ 駅から30分の同じような場所で250万の物件がある。もっと交渉の余地はありそうだな」

「向こうもまずは手探りなんだと思います」

この場所では簡単に借り手も付かない状態だ、こちらから貸してくれと頼み込まずとも

向こうから借りてほしいと願い出るよう誘導することも難しくないな。

長期契約となれば、相手サイドが相当な値下げに応じてくる可能性もある。

「いいところでしよう?」

「随分な張り切りようだが、改修工事等の予算見積りは?」

「こちらです!」

別の書類を鞄から取り出し差し出してくる。

どうやら最低限、考へて使うだけの能力を持つていいようだな。

工事に必要と思われる最低限の項目すべて、勘定は済んでいるようだ。
しかも3Dのモデリングまで作られている。

「これもおまえが?」

「はい。知り合いに建築業の人間がいるので頼んでみました。もちろん、この企画のこと
は一切話していませんのでご安心を。……どうでしょうか?」

「悪くない。だが余計な塗装などは一切不要だ。オシャレに金をかけるつもりはない」

「徹底した予算削減、ですね」

「見てくれば確実な金がついてからでいい」

「再度その方向で調整させてみます」

まずはプロジェクトを軌道に乗せることからだ。
だが結果も同時に求められる。

「ひとまずはよくやつた。早速こここの所有者に連絡を取りたい」

「仲介業者はどうしましょ? 飛ばしますか?」

「いや、既に仲介業者を挟んでいる以上下手な小細工はかえって逆効果だ。むしろ味方につけて動かした方がいいだろう」

「分かりました」

第一、第三候補は引き続き探していく必要があるが、出来れば一発で決めたいところだな。坂柳さかやなぎを通じた財界とのパーティ一、その日取りも近づいている。

「順調に行つたとしても……子供はどうするんですか？ 金と施設、それから教育者が準備できただとしても、肝心の子供がいないとどうしようもないですよね？」

無論、その点についても並行して進めている。

「心配するな。目星は付けてある」

「目星つていうと？ 具体的に教えてくださいよ。僕だつて仲間なんですから」

俺はそんな期待の目を向けてくる鴨川かもがわに、睨にらみをきかせる。

「世の中は知らない方がいいこともある。不用意に知れば、万が一の時俺はおまえを助てやることが出来なくなる。議員でいられなくなるどころか、何年、何十年と刑務所で漫ごす覚悟がおまえにはあるか？」

「い、いえっ……！ そ、それは全く無いです……！」

脅おどしじゃない。事実、表に出れば一発でアウトになるだろう計画を水面下で動かし始めている。この件に鴨川を関与させるわけにはいかない。

それは鴨川を守るためではなく俺を守るため。警察に連行されたこいつが、厳しい取り

調べを逃れ続けることは不可能だ。それに——連中も黙つちやいなうだらうからな。

「ともかく、子供は幾らでも確保する手立てがあるから心配するな」

通常、親の身元が分からぬ新生児が産まれた場合、児童相談所を通じて乳児院や児童養護施設へと送られる。それから養子縁組や、里親を見つけるといった流れ。

その後の人生が幸福か不幸かは分からぬが、それは実の両親に育てられたとしても同じ事。重要なのは恵まれた環境が与えられるかどうかの事実のみ。新生児を確保する手段さえ確立すれば、育成機関が間に入ることに何の問題もありはしない。

「おまえに話せないようなものではなく、もつと手軽かつ簡単に子供を入手する方法があればいいが、今はまだ難しいだろう。正攻法で攻めたとして、やはり見ず知らずの人間……それが政治家だと分かつていても簡単に子供を渡したりはしないだろうしな」

「そういうものなんですかね?」

確かに手厚い保護、政府の寵愛ちようあいを受けられるなど耳障りの良い言葉を幾つか並べれば、

母親側は喜んで新生児を差し出す可能性はある。

だが、現状はそうはならないケースを想定しなければならない。

「孤児院から引き取る手もあるのでは?」

「日本に孤児院は存在しない。正確には児童養護施設だな。そして、俺が求める新生児などの赤ん坊の場合は、児童養護施設ではなく乳児院というものになる。しかしそれらもこちらを疑つてくることは避けられない。命にかかることだからな」

「……なるほど」

一般的な暮らしをしていれば、この手のことに無頓着でも無理はない。

「無論乳児院にも当たるつもりだ。ただしそれは育成機関の運営が軌道に乗り政策であると決定してからだ」

しかし、いざれ本命となるのは子供の受け皿を自らが立ち上げ用意することだ。

産婦人科の院長を買収するか、それが叶わぬ場合産婦人科を開業させる。

悪魔に魂を売る医者を探すのはそれほどハードルの高いことじやないからな。

俺は具体的な計画書をパソコンの画面越しに鴨川へと見せながら説明していく。やむを得ず子供を育児できない母親の受け皿となる場所をこちらから作ること。

母親の胎内から生まれ出た日を0日とカウントし、生後28日未満の赤ちゃんは

の責任を問わない代わりに、一切子供と関わらない契約を結ぶ。

そして生後半年を迎えるまで体調管理を徹底させて生育した後、そこから教育プ

ムを実施していく。

「最初の数年間は完璧な教育を捨てる覚悟ってことですね？」

「ふざけたことを言うな。金があろうとなかろうと、1年目から徹底した教育を施す

途半端な成果で政財界が動くと思つてゐるのなら甘いぞ鴨川

ヤツらも自分たちの血肉を分けた子に幼少期から英才教育を施してゐる。それと見比べた上で、圧倒的な実力差をつけられなければ、この施設の信頼性が揺らぐ。

「サンブルは多ければ多いほどいい。10人でも20人でもとにかく受け入れる」

何人壊れようとも、その実態はもみ消してしまえばどうとということはない。生き残つたのが10人なら、最初から10人だつたことにするだけ。

それで教育機関としての有能さが示される。

「でも乳幼児に教育なんて出来るものなんですか？」言葉だつて通じませんよね

「ベビーサイン？」なんですか

「おまえの言うように乳幼児は喋る^{しゃべ}ことすら出来ない。そんな中ジエスチャードコミュニケ

ーションを図るために考えられたサインのことだ。言葉を覚え扱うのには脳の発達や筋力の成長が欠かせないが、手や指の発達はそれよりもずっと早い」

「はあ……」

「大人が考へてゐるよりも、ずっと赤ん坊は知能があるということだ。教えなければ泣く

ことしか出来ないが、ベビーサインを学習させれば何故泣いてゐるかを大人に伝えること

が出来る。このプロジェクトはその先を行く
早期学習の究極形態。産まれた瞬間から、徹底した教育を叩き込む。
それがこのプロジェクトの目的。

3

財界との繋がりを得るチャンスは確保した。

だが、無策のままいきなり挑んだところで都合よく金を出資してもらえるはず
大切なのが事前の準備であることは、この世界に入つてからの定石となつた。
歌舞伎町の中心に位置するビルの一室。

この日の夜、俺は1人この場所に足を運んでいた。

多い時には月に2、3回は訪れ、考え方をしたい時などに利用するキヤバクラ
時代遅れになりつつある商売ではあるが、今でも年配層には特に需要が高い。
政治の世界とは切つても切れない存在だ。

「いらっしゃいませ綾小路様」

見慣れた黒服のボーイが俺を出迎え、迅速な対応で店の中へと案内していく。

「美香は？」

「ええ、出勤しますよ。そろそろ綾小路様が来られるんじゃないかと彼女が話して

のが当たりました。さ、どうぞこちらへ」

店の奥、いつものVIPルームへと案内される。

部屋の中では既にキープボトルが数種類、そして幾つかのつまみも用意されていて、来店する前から、準備は進んでいるということだ。

「少々お待ちくださいませ」

ボーアイが頭を下げ一度部屋を退室する。

無言で高級ソファへと腰かけると、ドッと疲れの波が押し寄せてきた。
酒に手を伸ばす気力すらなく、俺はそのまま背もたれに身を預ける。
「ふうっ……」

自分でも少し驚くほどの深いため息。

「ここ最近は、ろくに眠れていなかつたからな。
急遽任されることになつた人材育成プロジェクトの重圧とその裏に潜む重責。

万が一にも失敗できない命がけの仕事。

教育施設の場所の目途は立つたが、そこを押さえる資金も足らなければ適任な教育
口が堅い人間を集め、外部に漏らさせないための仕組みも考える必要もある。
「金、金、金か……」

坂柳を通じ金を得る機会は与えられたが、実際どうなるかはまだわからない。

「どうなることやら……」

襲い来る眠気に耐えきれず、俺は目を閉じる。

事務所の固い生地との違いを噛み締めながら、俺は身体を休めるように横たわつ。それから、どれだけの時間が流れたのだろうか。

1分か1時間か。

不意に訪れた覚醒に目を開けると、横から視き込む顔があつた。見慣れた大きな瞳と唇。

いつもの俺を見る視線だ。

「起きた？」

「……どれくらい寝てた」

ソファーから身体を起こし、目覚ましにグラスのウイスキーを流し込む。

「多分10分くらいじゃない？ 相当疲れてるみたいね」

たつた10分。だが、その10分で少しだけ身体の方は軽くなつたようだつた。

「無理しないでお茶とか水にしておく？」

「いや、こういう時はむしろ飲んだ方が体調がいい」

美香は呆れつづも頷き、手慣れた様子で酒を足すとグラスの水滴を拭く。

「おまえに頼みがある」

、仕事のことを忘れたら？

「起きて最初の話題がそれ？」「そうはいかない」量る手に自然と力が籠る。

手にしたゲテノ

三
何

——大変よれ西藏へ。まともに仕事して、そんなものだろう。——」
「貴殿ざれたり。まともに仕事して、そんなものだろう。——」
「仕事」と思われて、いる。

で道を歩く中で、一般人から見る政治の世界など、こんなふうな罵声を浴びせあつてはいるのが仕事だよ!」「あんまは俺の付け入る隙はないからな」

多くの老害政治家が
あつおみ
篤臣なら凄い政治家になれると思う
憂へてく添わせる。

そう言つて、手のひらを俺の方へさし、
「お、女が、よく言えたもんだ」

「政治の世界を何も知らない女が、よく言ふたやうな、口うな、けど、男を見る目はそれなりに養われてるつもり」

「政治のことは知らないい」と、
横にいる美香は中学卒業後すぐ上京し、職を転々とした後、
この店で瞬く間にサムライの名前を知った。

を投じた。恵まれたルツケアと物

「政治のことは知らないけれど、男を見る目はそれなりに養われて、政治の世界を何も知らない女が、よく言ふ。」
「政治のことは知らな、いけど、男を見る目はそれなりに養われて、よく言ふ。」
「政治のことは知らな、いけど、男を見る目はそれなりに養われて、よく言ふ。」

にまで上り詰めた。

議員の接待で何處か物語
一時は恋人として付き合つたこともあつたが、それも昔のことだ。

その時関係を切らなかつたのは、肉体的な意味合いだけでなく、仕事でも有能な一面を持つていたからだ。

自身が持つ武器の使い方を熟知している美香は与野党の中核を担う複数の男と親しい関係を持った。家庭に悪影響を与えることのない、大人としての付き合いだけが出来る若く綺麗な女。政治家は多くの秘密を抱えている。人は秘密を抱えれば抱えるほど、その秘密が重たければ重たいほど人に語りたくなる生き物だ。

頭の良い女を政治家は警戒する。^も一方で頭の悪い女に対しても警戒が緩くなる。

どんな秘密を洩らしたところで『へえ』と分かつたようで分かつていい返事をする女
がいれば、ピロートークが弾むというもの。つい口が軽くなり余計なことを喋しゃべつてしまつ
たとしても、相手が覚えていないのなら心配する必要もない。

たがこの美香は違う。知識こそないか最低限の知恵は持ち合わせていた。

そして俺に協力する代わりにナンバー1の座と金を要求してきたのが全ての始まりだ。しかも、ただナンバー1を引きずり落とすだけではなく、徹底的に潰して欲しいとの希望も添えて。分かりやすい対価に応え、当時ナンバー1だった女を薬漬けにして排除してや

はしたがね

つた。今はどこかで汚い客の相手をして端金を得ていることだろう。

それからはより関係が深まり、互いに持ちつ持たれつを維持している。

「何人か弱みを握りたい」

俺はピックアップした財界の人間7名の写真をテーブルへと並べる。

「この中で見覚えのある顔や、引っ張れそうな人間はいるか？」

「どうだろ。ウチの店に顔を出してる人はいなさそうだけど……あ、でも、この人ウチの系列店で見たことがあるかも……。ちょっと待って、確認してみる。名前は？」

「曾根崎だ」

記憶を掘り起こすように、美香は携帯でどこかへと電話をかけた。

「あ、もしもしソフィア？ ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ、曾根崎さんつてお客様さん分かる？」

しばらく友達同士のお喋りに花を咲かせた後、美香が通話を終えて頷く。

「ビンゴだつた。ソフィアに熱入れてる太客がいて、その人だつた」

「なら好都合だ。上手く利用できないか？」

「どうすればいい？」

「この曾根崎は既婚者で中学生になる娘も2人いる。資産家ともなれば女遊びをして当然だが、それでも情事を家族に知られたいはずがない」

「シンプルにってことね」

「残りの人間に聞しても、可能な限り当たってくれ」

「オッケ」

「それからもう一つ。佐々田にも接近してもらいたい。最近は何かと立場が上がってきた
いるようだ。弱みの一つや二つ握つておきたい」

「……佐々田、ね。なんで？」

佐々田の名前に、美香の顔は嫌悪感を隠すこともなかつた。

「許可もなく平然と身体を触つて来るゲス野郎は嫌いなんだけど？」

「おまえにご執心なのか？」

「一晩相手をしたら幾らでも金をやるとまで言つてきてる」

「なら丁度いい。その希望に応えてやれ。ヤツが想定してる以上の金を引きずり出す
男には持ちえない武器。単純で効果的な戦略だ。

「幾ら貰えるの？」

「結果を出せば期待に沿う。俺がこれまで約束を違えたことがあつたか？」

「分かつた。気乗りはしないけど上手くやる」

「それから直江先生の相手も忘れずに頼むぞ。あの人もおまえを評価している」

「……どうかな」

ここで初めて美香の表情に陰りが見えた。

「あの人は、なんていうか……何度も近づいて接しても本当の心が見えてこないのよね」

おしほりを手に取り、適当にそれを折りだす。

おやじの手癖だ。

おしごりを手に取り、適当にそれを机みかへへておいた。美香がよくやる手癖だ。

嫌な話題の時、意識を逸らせるためにエネルギーを持つてゐるし」

「私から見たらおじいさんなのに、それを感じさせないエネルギーを持つてゐるし」

「さすがなあえ、流石は直江先生だな」

さすが
流石は直江先生だな

「おまえにそこまで言ふ、高齢な見た目に惑わされてはいけない最たる人物だろう。」

「気を付けてね。
河人の男に贈ってきた言葉だかな」
——テリブルの上に乱雑に置いた。

備以貿不濟

「取つておけ」
「もう帰つちゃうの？」時間、あるんだけど？」

「もう帰っちゃうの」「悪いがそれほどやりくりしている暇はない」「悪いがそれほどやりくりしている暇はない」

酒を女が生んで、いつのまにかは、いずれついてくる。

そんなものはいずれついてくる。
今重要なのはプロジェクトを完璧に遂行し、直江派閥で名を売るこだ。

床も天井も壁も、何もかも白を基調とした造りになつてゐる。

あえて単色にこだわつたのは、この施設がクリーンなものであると印象付けるためだ。純粋、無垢、清潔、神聖、白にはプラスとなる強いイメージが幾つも盛り込まれてゐる。これからここで行われる教育の視察に、いづれは政府関係者も多く訪れることになる。ちよつとしたイメージ戦略だが侮れない要素だ。

「おはようございます綾小路さん」

「おう」

鴨川は技師と一緒に埼玉の現地にて最終チェックのため前入りし、ボードを片手に施設内を確認。その作業も終わりを迎えたようで、安堵したような顔で事務所に戻つてきた。

「施工全て完了しました」

「よくやつた。俺の想像していた通りの施設が出来上がつたようだな」

「しかしあの予算で、よくここまで見事に改築しましたよね。普通なら倍近くの予算がかつてもおかしくないのに」

「叩けば埃の出てくる建設業者も少なくないからな」

脅しに合わせて甘い話を耳元で囁けば、利益度外視で協力してくれるというものの。

「いよいよ現実味を帯びてきましたね。人材育成プロジェクト」

「そうだな」

「それもこれも、綾小路さんが財界の人たちを動かせたからですね。一晩で4億近くも集

「お前ら、土地建物、この施設そのものの工事に投資した金。 めるんですから大したものですよ」

るんですから大したものですよ」
その4億も教育者たち、土地建物、この施設そのものの工
事で、彼らで殆どが消えてしまつたがな。

「金を集めるのは命がけだから、金を稼ぐのは命がけだ。俺の存在も、俺を含め、同時に幾つもの案件に出資し、そのどれかが当たれば儲けもの、その程度に奴らは辟易するほど金を持つてゐるが、名譽と名声には常に飢え続いている。奴らは見返りにそれがついてくる。パーティのあの様子からしての企画が成功すれば、奴らの見返りにそれがついてくる。奴らはこんな案件を裏では幾つも抱えているんだろう」

しか考えていないか、ってことですか」「期待はされてない、過度な注目を浴びる方がリスクだ」

「今はそれでいい。もし不運で、少しこなつてもくる。
その場合は確実に確保しなければならない。

ただ、この先が肝心にがんばらねばならぬと、教育を施す教師役に加え、それを受けける子供たちも研究プロジェクトを担う施設の名称を考えた

「だがその前に、人材育成アロジ、よって名前にするんです？」

「え、 そうなんですか？ なんで名前。
。青廉さを与える白を強調したイメージを前に持
てナガ二分かりやすくていいですね」

「ホワイトルーム」なるほど、シンプルですけど？」
「ホワイトルーム……」。」

誰が見ても、ここは名の通りホー

「早く直江先生をはじめとして、いろんな方に足を運んでもらえるようになるといいです
よね」「そう浮かれる鴨川だが、事はそう容^た易^{やす}く進まないだろう。

「鴨川。おまえに大切なことを教えておく。政治の世界は敵か味方かの単純な二元論じゃ
ない。安易な発想で挑めば取り返しのつかないことになる」

「え……？」

意味が分からなかつたのか、間抜けな面で首を傾げている。

「いい。おまえにはまだ早い話だつたな」

どれだけ順調に見えても、俺はまだいつ崩れるとも知れない橋の上を歩いている。
その橋の上を歩いていく恐怖を、鴨川はまだ知らない。

「この後はどうされるんです？」

「今日はここで数人と会い面接することになつていて。ホワイトルームを運営するのは俺
たちだけでは不可能だからな。4時を予定している」

ど素人^しがいきなり子供に教育を施そうとしたところで、不可能な話だ。

時計を見た鴨川が、少しバツが悪そうに頭を下げた。

あと10分ほどで面接時間の4時になるため、自分が邪魔だと思ったのだろう。

「ついでおまえも立ち会つていけ」「え、いいんですか？」

「おまえもホワイトルームの責任者側だ。どんな相手かを見極める権利がある」
嬉しそうに目を輝かせ鴨川は慌ただしく片づけを始めた。

ほどなくして4時を迎える1分程前になつて、事務所をノックする来訪者。

「入つてくれ」

白衣姿で現れた男、宗谷が、軽く会釈して近づいてくる。

「どうもどうも綾小路さん。私のようなはぐれ者の研究者に、大先生から声をかけて頂けるなんて思つてもいませんでしたよ」

薄ら笑いを浮かべながら握手を求めてくるが、俺はその手を見下ろし視線をあげた。

「まだ採用するとは言つていない」

現れた宗谷という男は元々は医者だつたが、問題行動を数々起こした結果医師免許を剥奪された。その後は人間の成長に関する研究を始め論文を発表。一部からは高い評価を得たが、過去の経験から煙たがられ表舞台には復帰できていない。

「鴨川。彼の第一印象で思つたことがあれば言つてみるといい」

「構わない……なんですか？」

水を差すまいと黙つていた鴨川だが、その表情には言いたいことを我慢していた様子。
簡単に見て取れる。

「おまえの意見を聞きたい」

「あの、失禮ですがどうして白衣で来られたんです？」

「どうしても何も、裸では来れないでしょ」

「そうじゃなくて……普通、面接ではスーツを着てくるのが常識だと 思いますが」

宗谷は自分の服を見て小さくなるほど、とやや納得に欠ける領^{うなづ}きをする。

「それは些^さ細なことでは? 私の正装は白衣ですから、特に問題は無いかと。むしろ

ツなどより真剣そのものだと捉えて頂きたいのですね」

「悪びれる様子もなく、宗谷はそう答えた。

「あ、綾小路さん……どうするんです?」

こんな男を採用する気ですか? そう目が訴えている。

確かに態度や面接用とも思えない格好^{かつこう}には多くの問題を抱えていると言えるだろう
しかしホワイトルームが求める人材にはどちらも不要なものだ。

「医師免許こそ持つていませんが、私の経歴は見事なものだと自負しています」
「おまえの経歴はどうでもいい」

その勘違いを、まずは切って捨ててやる必要があるようだ。

そこで初めて宗谷は、へらへらとした態度を僅^{わず}かに硬化させた。

「もう結構。……やはりあなたも私のやつたことを批難するつもりですね? 過去の

など関係なしに面接をするというから来てみたが、失敗でしたよ」

「勝手に結論付けるな。俺は経歴がどうでもいいと言ったんだ。それはおまえの歩いて

た軌跡全てに対して言つていい。どこの大学を出た、どの病院に勤めていた、どんな罪

犯してきたか。それら全てに興味がない

「俺が求めているのは今現在の思想、そして能力だけだ。おまえは医者としての観察と技術

「私は人を見れば大体のことは分かる。それは今でも変わっていない」

初めて研究者としての顔を覗かせる宗谷。

「非合法な世界に足を踏み入れるには相応の度胸と覚悟がいる。俺がここで見たかったのはただそれだけだ。実際に使えるのかどうかは現場に出てみなければ本当の意味では判断できないことだからな」

性格がどうのこうのと、そんなところまで選りすぐっている余裕はこちらにはない。

「……失礼しました」

頼んでもいないのに、深々と宗谷は頭を下げた。

「解雇になつて数年……貯金を食いつぶしながら私はいつも苛立つてしまつた過ちを」

「外界と自分を遮断し続けてきた

「後悔してきたんですね、自分のやつてしまつた過ちを」「後悔？ 後悔などしていませんよ。何故周りの連中が私を売つたのか、今思い出ムカムカして仕方ない」

自分が悪いことをしたなどとは微塵も思っていない。

まさに落ちるべくして落ちた人間性というわけだな。

「おまえに蘇るチャンスをやる。これから先俺のもとで、元医者として、研究者として、

対象となる者たちを管理し、そして成長させる手助けを行ってもらう。いいな?」

行く当てのないこの男は、以前と変わらぬ待遇で雇用してやる分には何一つ不満を漏らすことはない。

「ありがとうございます。必ずやご期待に沿つて見せますよ」

宗谷を採用することをその場で伝え、帰す。

「本当にあんな奴を雇つて大丈夫でしょうか……僕は心配です」

「言いたいことは理解してやる。だが、俺たちにとつてはむしろ好都合だ」

「そう、なんですか?」

「奴の周囲には親しい者はいない。そして金に執着し、外界の名譽を求めていない。金を
与え働く場を与えておけば裏切るような真似はしないだろう。ここでは外部の人間と接触
して第三の利益を生むようなことも不可能だ」

もちろん脅しをかけ賃上げ要求をしてくる可能性が全くないとは言えないが、その程度
の行動をするようならばこちらとしても対処を迷う必要がない。

「奴も俺と対面して理解したはずだ。敵に回すのが得策な相手ではないとな」

「あの男だけで参つていいたらこの後がもたんぞ。この宗谷だけでなく、腕は確かだが問題を起こして首になつた人間ばかりを集めめたからな」

「統率を取る意味では油断が出来ないが、実力としては頼もしい限りだ。」

「それ以外にも産婦人科を経営していた者や生態学のエキスパート、オリンピック選手を作り上げた指導者など、育成分野のプロを用意した。」

「もちろん、これはスタートの段階での話。ここから更に手を広げありとあらゆる分野の天才たちを呼び寄せ子供たちの育成に力を入れさせる。」

「しかし詳しく聞かなくてよかつたんですか？ どれだけ働くか分かりませんよ」

「詳細の説明は不要だ。どうせ俺には医学や教育のことは分からんんだからな。今はこちらがいつでも強気に出るという部分を相手に強調しつつ、取れる戦力は手当たり次第に取つて採用する」

「つまり面接に来る人は……ほぼ合格が決まつていると？」

「そういうことだ。だからおまえの同席があつてもなくとも差支えはない」

「プレッシャーを与える意味では、多少は役に立つていると見てもいいだろう。」

「今から俺が勉強したところで得られる知識などたかが知れている。」

「ド素人が首を突っ込むよりも、専門家には専門家をぶつける方が最善だ。」

「奴^{やつ}が本当に出来るのか、あるいはこれから面接に来る奴の能力がどうなのか、それら風^{かぜ}の連中に曉^あわせることでおのずと答えが見えてくる」

教育が成果を生んだかどうかは、別の専門チームが分析する。そこで一定の成果が目
れなければ、容赦なく首を切るだけだ。

5

「お、終わりましたね……思つたより疲れました」

午後4時から始まつた面接だつたが、合計6人との対面を終え時刻は午後8時を
ぎていた。

脱力する鴨川の気持ちはよくわかる。

どいつもこいつもが、その道のプロフェッショナルであることに疑いはない。

しかし人間としてはあまりに未熟かつ、吐き気を催す連中ばかりだつた。

まともな会話が成立するなどと考えてはいけないということだ。

今日集まつた連中を全員採用するのは簡単だが……。

「どうするんですか？」

「人間性として強く問題はあるが、石田、宗谷は採用する。それから一番まともな感
持つていると感じた田淵。残りは能力の高さよりも内面の問題が強すぎるため今回け
るつもりだ」

「発言はともかく、経歴や考え方は凄かつたですもんね。僕には理解できませんが……」

しかしこれでプロジェクトが上手く回りだすかどうかは未知数のままだ。面接すれば少しは見えてくるかと思つたが……。どうにも、不安がぬぐい切れない。

有能にしても、突き抜けたものが感じられなかつた。本当にこれで最高の教育を施すことなど可能なのか？

「飯にでも行くか」

考えていても埒^{らち}が明かない、ひとまずは頭をリセットするべきだろう。

「ですね！　こんな時はパーツと行きましょう！」

「気分転換のため鴨川^{かもがわ}を飯に誘い携帯をポケットから取り出しつつ席を立つた直後。

「綾小路^{あやのこうじ}さん、何か落ちましたよ？」

そう言つて床から拾い上げた一枚の紙を俺に差し出してくる。名刺だつた。

「……月城、か」

直江^{なおえ}先生の紹介じや、何でも屋ということらしかつたが……。

「ああそういういえれば貰^{もら}つてましたね。ぐしゃぐしゃですけど」

「どれだけ使えるのか、確かめてみるのもいいかも知れんな」

「え、連絡するんですか？　なんか、笑顔が怖い人でしたけど」

「きな臭い肩書きだがあの直江先生が役に立たない人間を傍に置くことは絶対にない。連絡を取るだけ取つてみてもいいかも知れんな。」

名刺に書かれた番号に携帯でかけてみる。
もしここで繋がらないようなら、縁がなかつたと割り切つてもいいだろう。

それくらいの気持ちだった。

番号を打ち込み、数コール鳴った後――。

『ご連絡頂けると思つていましたよ、綾小路さん』

『ご連絡頂けると思つていましたよ、綾小路さん』
声の質からも月城と思われる男は迷わずそう答えながら電話に出た。

「何故俺だと分かつた」

こちらから番号を教えたことはなく、月城にかけるのも正真正銘初めてのこと
『予め調べておくのは当然のことですから』

「気に入らないな」

電話番号を調べること自体は驚くようなことでもない。

直江先生の周辺、秘書辺りにでも聞けばすぐに分かることだからな。不服な
で俺から電話がかかっていることを見透かしていたような態度であることだ。

「直江先生に何を吹き込まれている」

単なる紹介だけとは思えない。仕組まれた裏があることを直感で感じ取つた。

「仰つて いる意味は理解しますが、ここで答えることは出来かねますね」

「俺がしくじらないか見張つて いる―― そんなところなんだろ?」

声だけでは、相手の動搖や本質を察知することは出来ない。

しかしそれは同時に危険な判断でもあるだろう。

斷つもあるだろう。

しかしそれは同時に危険な判断でもあるだろう。
少なくとも直感として、この月城^{つきしろ}という男^{たやナ}が容易く隙を見せるとも思えない。
『良ければ近々お会いできませんか？ そちらのご期待にも沿えるかも知れません』
どうしたものか考えていると、月城側から誘いをかけてくる。

「期待だと？」
ボーラムで電話をかけてきたのでは？』

『心要なら今からでも構いませんよ』

今からだと？ 木三
「どうあるのか。

今からたまに、あるいは別の狙いでもあるのか、その話に乗つかつてやることにする。

「わな
罠を警戒するが、あえてその言
はり無理だとは言わせんぞ」

「なら今からだ。やはれ無理、ましようか？」
こちらからお伺い！」

「無論です。ではどうし

にいひへ

貴様

貴様、
俺が今事務所に滞在していることまで把握しているだと?
「私から出向いた方が話の方はスムーズに行きそうですね。では1時間ほど

ろしいですか？」

「好きにしろ」
俺が接触してくることに確信があつたかどうかは別問題として、月城が俺の
ていること、また把握していることだけは間違いないだろう。
この大がかりなプロジェクトは、直江先生を中心に常に情報が飛び交つて
「あの、どうなつたんですか？」

「今から月城と会う」

「ええつ今からですか!? 飯は……」

「おまえ1人で行け。奴^{やつ}とは俺1人で会う」

プロジェクトに片足を突っ込んでいる以上、鴨川^{かもがわ}は情報の宝庫だ。
相手が敵になる可能性もあるだけに、コイツの存在は邪魔になる。

6

それから1時間。俺は事務所の外で奴がどう現れるのか待ち続けていた。
するとほぼ約束の時間通り、黒のBMWが姿を見せる。

「駐車場に停めますので、少しお待ちください」

運転席の窓を開けてそう言つた月城が、パーキングに車を入れて戻つてくる。

「自分で運転してくるとはな」

「基本的に仕事は1人で行うことが多いもので。それに運転を他人に任せることないんですよ。命を握らせているのと同じですから」
大げさな男だと思ったが、それだけ自分の身が危険に晒されるリスクを背返しなのかも知れない。俺も時折、月城^{つきしろ}が言つたようなことを考へることも事務所へと通し、俺は月城を適当な場所に座らせる。

「俺の期待に応えられるかも知れないと言つていたが、用件は分かつていて常に笑顔を絶やさない、そんな不気味な気配が漂つていて」

「ええ。人材育成プロジェクト絡み、ですよね」

「何から何までお見通しのようだな直江先生は。最初から俺だけに任せたと
いうことか」

あの日、直江先生は俺と鴨川^{かもがわ}だけにプロジェクトを任せてくれたと
そんな風に解釈してしまつた自分自身が悪かつただけなのだが。初め
生としても失敗は出来ないと判断し、保険を打つていると考へるのが
「俺が倒れれば、おまえがこのプロジェクトを引き継ぎ、遂行を任せ
「そうかも知れませんし、そうではないかも知れません」

「もちろん、素直に答えることはないだろう。

この男の年齢は俺とどう変わらないはずだが、踏んだ場数は少な

だとすれば頼られていても不思議はない。

「いや違う、か。俺の代わりとなる政治家を改めて見張るだけなんだろうな」
俺と鴨川がしくじれば、他の政治家がプロジェクトを引き継ぐ。

そして、常に月城は大局的に状況を観察し収集し直江先生に報告をあげる。

「お見事。半分正解です綾小路さん」

「半分だと？」

「ええ。私が任されている役目は2つ。1つは今仰つたことと相違ありません。
もう1つは人材育成プロジェクトを任された政治家の補助を仰せつかっているんで
「補助だと？」

「強力なサポートです。ですが、喜んでいただけていないようですね」

補助と言えば聞こえはいいが、失敗したときの処理係も同時に兼ねていてははずだ。
「どうにも解せんな。俺とそう歳も変わらないおまえを直江先生が頼るとは思えん」
「確かに私も綾小路さんと同じで政治の世界から見れば若輩者です。しかし、大物政
のサポートというのは優秀であれば若くとも重宝されるものです。まあ、私の場合
治家に限らずどんな相手とでもお仕事をしますが」

自分が優秀であることを隠そうともしない月城。

自意識過剰なわけではないだろう。実績に基づいた確信を覗かせている。

「おまえに仕事を頼む前に、確認しておきたいことがある」

「なんでしょうか」

「俺は今朝の新聞を取り出し小さな隔にあつた記事を指さし指摘する。

「俺は茨城県の大洗町いばらきけん　おおあらいまち　こここの港で死体があがつたそうだ」

「然程珍しい話ではないでしよう。日本全国、人は秒単位で死んでいますから」

「地方記者じほうきしゃだが、俺はこの男なまこを知っている。政界、主に与党の市民党を嫌うアンチとして」

「一匹狼いっぴきわらわをやつていた男だ。直江先生に何度も取材を申し込んで来たこともある」

「それが？　今この場つきしろで関係のある話ですか？」

「貴様がやつたのか、月城つきしろ」

「貴様がやつたのかをお聞きになりますね緩小路あやのこうじさん。私がイエスと答えるとでも

「随分と直接的なことをお聞きには、この記者がこの間料亭でおまえ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、その点だ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、この記者がこの間料亭でおまえ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、この記者がこの間料亭でおまえ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、この記者がこの間料亭でおまえ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、この記者がこの間料亭でおまえ」

「そんなことはどうでもいい。俺が知りたいのは、この記者がこの間料亭でおまえ」

月城は眉ひとつ動かすことはなく、新聞の記事に軽く目を落とした。

月城は眉ひとつ動かすことはなく、新聞の記事に軽く目を落とした。

月城は眉ひとつ動かすことはなく、新聞の記事に軽く目を落とした。

「それは恐怖ではないようですね。いやはや……まさかの怒り、ですか」

興味深そうに俺の行動を分析した月城が続ける。

確かにこの話の下り、普通は恐怖、恐怖、慄くのが自然な流れだろう。

目の前の不気味な男は仕事として1人の人間を始末した可能性があるのだから。

しかし俺が月城に恐怖心を抱くようなことはない。

「どうしてその仕事を自分が任せなかつたのか——そこから生まれる怒り、で、

「汚れ仕事は俺の役目だ。これまでもそうしてきた」

たつた一言命じてもらえば、この男に劣らぬ処理をしてみせる自信がある。

「少なくとも死体を見つけられる間抜けなことはしない」

「あなたの交友関係は存じあげております。大場組とは随分と親しくされているよ、
ね、綾小路さん」

こちらのことは当然のようには把握している、か。

「なら俺が貴様に恐怖する事がないことなど、早い段階で分かるはずだ」

「大場組は大きな組織ではありませんが、相当な札付きを抱えていますからね。あなたが友好的な関係を築くまでには相応の苦労を伴つたこと、お察しします。しかし死体は見らなければ死体ではない。ただの行方不明では、直江先生を見張る無数のネズミたちを冷やすことは出来なかつたことでしょう」

つまり隠し損ねたのではなく、意図的に死体を見つけさせた……と。

地方記者の死に月城つきしろが関与していいるのかしていないのか、もはやそれは関係がない。
ここで腕を伸ばし、胸倉を掴つかみ上げたところで脅おどしが通用する相手とは思えん。
そう思わされた時点で、こいつの戦略は上手く作用している。

「心中お察ししますが、それだけ直江先生が人材育成計画に心血を注いでいる証拠で
う。あなたを抜擢する^{ばつてき}と決めた以上、たかが記者を沈めるためだけに危険な橋を渡ら
くはなかつたんです。仮に今回の一件が問題になつたとしても、それで罪をかぶるの
は、別の誰かだけで済みますからね」

洋も素性も知れない別の話だから、この男は危険だ。が、実力は高く、そして事情を把握しているのなら話も早い。この男には到達できんか。

「気に入らない部分は多いが背に腹は代えられないからな」
「前に見た『物語』は物語の難して物事を考へるべきでしよう」

これ以上の雜談は無駄な事だ。

本題に入らせてもらうとして、研究所の職員を面接していた。ある程度の人物確保に一
章二二

「さつきまで新しい研究所の職員を面接」
決め手には欠けて いる状況だ。再び探すとなれば時間も要する

「私に、人材の手配が頼めないか」「心当たりがあるならな。しかし中途半端な戦力は求めていない」

「心当たりがあるならな、
ご心配なく。緩小路さ

綾小路さんご納得

「ほう?」

「しかし、それを紹介するかはまた別の話。分かりますよね?」

この世の大半はビジネスで成り立っている。

相手が好きか嫌いか、厚い薄いの関係に意味などない。

「分かっている。幾らだ」

対価を支払うことで見返りが得られるのならこちらに不満はない。

「セオリーなら金銭で解決するのが一番ですが、私には私なりのポリシーがあります。クライアントとなりうる方とは腰を据えて話をさせて頂きたいと思っています。の場で面談させて頂けますでしょうか?」

「おかしな話だな。つい今しがたまで面接をしていた俺が、今度はされる側かふざけたことを。しかし僅かな時間やプライドのためにチャンスを捨てるの分かった。好きにすればいい」

「ここは月城のお遊びに付き合い、使えるかどうかをこちらも確かめてやる。ありがとうございます」

月城は薄い水色のクリアファイルを取り出すと、そこから何枚か紙を取り出すここまで話を運ぶことも、全ては計算通りなわけか。

「綾小路篤臣、年齢31歳。男性。熊本県阿蘇市出身、最終学歴は高卒——」「ちょっと待て。そんなことから面談で確認する必要が?」

「重要なことです」

ふざけているわけではないのだろうが、その薄ら笑みには吐き気がする。

「私とあなたは対等です。いや対等ですらないのかも知れません。何をもつて上下関係を決めるのかも、今は自由、あなたが決めればいい。腹の中で悪態をつかれるくらいであれば、どうぞ遠慮なく言葉にしていただいて結構です」

ヘラヘラしているが、どこまで本気なんだコイツは。

しかし、既に俺の中での判断は下った。

しかし似通った性格をしているということは分かつたからな。
まるで違うようで、しかも似通った性格をしていなかつたが、それでもどこか背後の直江先生を見てセーブし、「これまで遠慮はしていなかつたが、それでもどこか背後の直江先生を見てセーブしておこうか」と言つた。ここからは本当の意味で遠慮なく対応させてもらおうか

「その方がいい」

月城は再び話し始める。

ニヤリと笑つてから、月城は再び話し始める。
「追えるだけ経歴を追いました。あなたの人生はけしてイージーではなく、貧しく

「幼少期を送られたようですね」

どこまで調べてきているのかは不明だが、それなりに調査は済んでいるようだ。

俺の子供時代、学生時代を知る者に接触している可能性は高そうだ。
「家族構成についても調べさせていただきました。両親は幼いあなたを捨て蒸氣

祖父母に育てられたそうですね」

この「ぶりからも、下手な嘘はかえって逆効果か。

「親もない、金もない、まともな家もない。そう判断されても仕方ない人生だ」

「まともな家もない？ どんなところに住んでいたんですか？」

「近所の大人たちが管理する農具を収容するための掘立小屋だ。屋根も粗末なトタンで電気もガスもなかつた。風呂はタライにカセットコンロで沸かした湯を入れ週に1回だけ入つていた」

自慢するような過去ではなく、むしろ他人からすれば自虐に聞こえるだろう。
しかし過去に悲観はしていない。

お陰で俺は成り上がる決意を生む人生を歩めたと思つてゐるくらいだ。

「俺が中学に上がつた頃に祖父が病死した。だが、それは1つの転機だつた。生前、にかけていた保険金が振り込まれ、祖母と共に近くの古い民家を買い取つて移り住めらるな」

そんな民家も、他人にしてみればとても住みたいと思えるような家ではないだろう。
しかし俺は大きな城を手に入れた気分がして嬉しかつたことを覚えている。

「おばあさまはご存命で？」

「いいや。俺が二十歳を越えた辺りで死んだと記憶している。恐らくな」「随分と適當ですね」

「死に目には会つていない、そんなことに興味すらない。俺は俺のために生きるので精い

つぱいだったからな」

遠方の遠方、親戚筋らしき者から電話が1度だけあつたが、俺は葬儀には参加しなかつた。最低限の費用だけを払い、全て処理させた。

祖父も含めどこに墓があるのか、遺骨が納められているのかすら分かつていらない。

「あなたを懸命に育て上げたにしては、虚しい最期になつたわけですね」

「懸命、懸命か。どうだつたかは分からんがな」

もちろん子育てが大変であることは承知している上で、そう考える。

「だが虚しい最期だったのは事実だろう。必死の思いで育てた息子は子供を捨ててじへと消え去り、残された孫は育ての親の自分を助けようともしない。何十年も貧乏を強いられ贅沢などしたこともないはずだ」

もし俺が祖母として生きていたなら、まさに生き地獄だと評しただろう。

もし俺が祖母として生きていたなら、まさに生き地獄だと評しただろう。

「その状況を今客観的に見て、どうですか。心が痛みますか？」

「いいや？ 当時と何も変わらない。いやそれ以上だ。祖母は自ら負け犬の人け犬として死んでいった。せめて孫の俺を捨て祖父の保険金を上手く使えば、な人生が送れただらうにな」

俺はそんな惨めな人生を送るつもりはさらさらない。

「政治家を志すようになつたのはいつからですか？」

「ホスト時代に客として来ていた女から話を聞かされたのが始まりだ。政治家は金になる
上に権力も手に入るとな」

実際、界隈ではキヤバクラで遊びまわる議員も少なくなかつた。

国民の血税を貰い遊びまわる、そんな連中が羨ましいと思つたのがきつかけだ。

「25歳で初出馬するも、投票数は絶望的で供託金没収と共に惨敗」

月城は調べ上げている俺のプロフィールを読み上げる。

「27歳で衆議院解散と共に再出馬を表明し、直江先生に気に入られ後押しを受け初当選
2年間の間に随分と政治のことを勉強したようですね」

「人生で一番死に物狂いだつたことだけは認める。元ホストとして女を使い直江先生
くに取り入つた。もちろんそれだけで認めてもらえるはずもないが、俺の執拗なまで
触と熱意、そして野心を買つてもらえたと自負している」

もつと根掘り葉掘り聞いてくるかと思つたが、月城は満足したように頷く。

「詳しい話ありがとうございました」

ファイルを閉じ、月城は俺と向き合う。

「いいでしよう。あなたをクライアントとして認めます」

そう言い、月城は新たなファイルを取り出した。

「待て。この程度の話で俺をクライアントとして認めるだと?」

「あなたには知識等が足らない一面もあるが、そんなものは重要ではありません。恵まよ

た頭脳も肉体も代替は幾らでも用意できる。大切なのはあなたの「考え方」です。間違えていたと判断しました」
俺は目の前のファイルに視線を落とす。

「あなたの眼镜に合うであろう、優秀な人員です」

俺が研究員を欲し、月城に連絡することまで見抜いていたのか。
いや、あるいは裏で直江先生がバックアップしている可能性もあるだろう。

「幾らだ」

「今日は結構です。いつか将来、大きくして返して頂ければそれが一番ですから。
はいつか大物になるかも知れない。それが私が引き受けることにした一番の理由
は「笑わせるな。何人の政治家に同じ事を囁いてきた。そんな世辞を素直に受け取
ていいのか?」

こうして素質を認めたとほゞこの男ですら、その背景を見て協力を決めた
「もちろん1人や2人でないだけは確かですね」

あつさりと認め、立ち上がる。

「素質に優れていればいる程政治の世界では敵を増やす。出る杭は打たれ、
われる。あなたの悪と野心が、より強大な力にねじ伏せられることがあるで
わざる」

「大人しく潰されたりはせんがな」

「そりやうね。あなたは自分が殺されそうな場面に遭遇すれば、相手を

にする覺悟を持つてゐる。そういう存在はしぶとく生き残るものですよ」

政治の世界において駆け出しである俺は、直江先生の後ろ盾がなければ何もできない月城と事務所を出ると、白衣をまとつた若い男が1人、俺の前に新たにやつて來た。

「彼がお探しの人物です。この間に来るよう指示しておきました」

「最初からそのつもりだつたのか」

「もちろん、私の面談で不合格であつたなら会わせるつもりはありませんでしたけどね」

そう言つて月城は一礼し、事務所を去つていつた。

新たに追加したもう1人の面会時間。

履歴書には『鈴懸鍛治』と少し珍しい名前が書かれてある。

「どうも」

「座つてくれ」

月城、直江先生サイドが手配してくれた人材とはいえ油断はできない。

採用する人間は、細部にまで質疑を行い問題がないかをチェックしなければ。

室内に入ってきた鈴懸という男は、無精ひげをはやしだらしない中年のような印象を受けるが年齢は俺よりも若く29歳。東大を首席で卒業して渡米するも、特に大きな実績を作つたことはない。

言わば地頭だけの肩書きを持たない男だつたが、何故このような男をあの月城サイドが薦めてきたのかはまだわからない。

「履歴書は随分と真っ白なようだが、海外では何をしていた?」

「やりたいことをやってた」

「……やりたいこととは?」

「まあ色々だな」

「それでは分かりかねるな。具体的に発言してくれ」

「人間觀察」

ろくな敬語も使えない、そんな人間を今日沢山見ていてよかつた。

中途半端な敬語よりも普通に話される方が幾分かマシであることを知れたな。

「では何故、今回面接を受けようと思つたのか教えてください」

「金払いがいいと聞いた。海外に留まり続けるには金が必要」

「日本とは比べ物にならない物価高ですからね、無理もないが」

「能力があれば現地にとどまつて働くべきだがこの男の態度を見ていればそれが難」

とは問い合わせすまでもないことだ。

「俺からもあんたに聞きたいことがあるんだが……」

「なんでしょう」

「その前に、その気持ち悪い敬語を止めてくれ。俺を虫けらのように見るのは勝

本気で仕事をしたいと考えてるならあんたの本性を知つておきたい」

「……なるほど。それは構わんが帰ることになるだけじゃないのか?」

相手が望むなら、こちらも人間の皮を被つていて必要はないからな。

正していた姿勢を少し崩し、脚を組んだ。

「今のところおまえは不採用だ鈴懸。名門校を現役、しかも全て首席で卒業した
価に値するが、その後何ら残していない」

「残すだけの舞台が用意されていなかつただけだ」

そう答え、すぐに言葉を続ける。

「俺は名声も肩書きも求めていない。だが、人間のメカニズムを解明したいと思
た」

「肩書きは求めていない、か。こちらの期待に応える成果を残せばおまえたちに
で得られなかつた報酬を用意する。そして、ホワイトルームプロジェクトが成功す
る名譽を求めることも出来るだろう」

ホワイトルームに関する資料を手渡すと、鈴懸はすぐに目を通しはじめた。

目の前に大量のニンジンをぶら下げ、こいつらにも遺憾なく才能を發揮させてや
ればならない。そう思つたが、研究者というものは分からぬものだ。
子供のように目を輝かせ、施設の設備や環境の確認を行い、自らの希望や理想を暗
呴き始めていた。

後日、改修工事を終えた埼玉のホワイトルームに足を運んだ俺は、イメー
もに更なる教育者の選定に頭を悩ませていた。そこへ鴨川が足を運んで来る
「お疲れ様です綾小路さん。肝心の子供たちの方は……手配は進んでいる
「そうでなければ計画が始められんだろ。ほぼスキームは完了している」
「お、おお流石ですね……。も、もちろん中身は言わなくて結構ですか」
「こくないですか」

捕まつたりしたくないで、二語つて、いい子供を集める手段。

捕まつたいにしたくない子供を集める手段
この鴨川に語つていない子供を手に入れ
それは、大場組おおばを使い闇ブローカーから非合法に新生児を手に入れ
しかしこれには多くの危険を伴う。そのため、いざれば正攻法で子
しかしこれには多くはない。さればならない。

しかしこれには多くの作られて
てへと切り替えていかなければならぬ。
まだ構想の段階だが、近い将来ホームページを立ち上げ、生まれ
ない事情で育てられない親から、子供を預かる受け皿になると告知
本来なら、出産前から協力してやるのが理想だろう。出産一つと
ず、費用を捻出できない女もいる。ひとつり産み死なせてしまふ
だ。無論、理論上は可能だ。が、同時に大きなリスクも付きまと
た時点では本当の意味で親にはなれていない。産めない、産んで

いても、いざ対面した瞬間に母親になってしまふケースは少くないだろう。それに万が一、死亡事故が起きてもしたらどうする。我が子を返せと訴えられれば、背景にあるホワイトルームまで足がつく。それは避けなければならん。

表沙汰になれば直江先生の名に傷をつけるどころの騒ぎじやないからな。

あくまで、他所で産み責任のない状態、かつ母親になれない者からだけ子供を引きることが肝要だ。

ホームページでは綺麗事、偽善の言葉を無数に並べたるのがいいだろう。

『命を奪わないで』『匿名で赤ちゃんを引き受けます』『生活困窮相談受付』『里親制度組み』など、自分自身と我が子の将来を保証するようなうたい文句だ。

病院を訪れた母親に、まずは必ず面会を設ける。名前も住まいも聞かず、ただ自由供を育てられない理由を述べさせる。もし単に表立つて産めない子であれば、そのまんなり里親に出すことを認める者もいるだろう。金に困っている者であれば多少金をせせてやつてもいい。やむを得ず子供を病院に渡す際、1週間は必ず猶予を設ける。翌降、子供を手放したこと後悔する親も出てくるかも知れない。

こうして認知されていない子供たちを集めホワイトルームへと送り込む。

万が一、2年3年して我が子を返せと言われても構わないよう、各母親との繋がりけは名前という形で残しておく。

もちろん里親に出した子供を返せ、そんな道理は通用しないのだがな。

こちらとしても非合法なことをやる以上、表沙汰にされることだけは避けない。これらのことからも、子供という商品の扱いは極めて繊細で難しい。

「問題なのは、どちらかと言えばその先。ホワイトルームに連れてきた子供の医

「医療……ですか」

「子供は弱い。ちょっとしたことで体調を崩す。しかし病院に連れていくこと、上ホワイトルームの中で治療出来るだけのドクターが必要不可欠だ」

医者と言つても誰でもいいわけじゃない。

医者と言つても誰でもいいわけじゃない。
 条件は幾つかあり、医師免許を剥奪された者であること。考えが柔軟で
 な限り年齢は高め、かつ高齢過ぎないこと。そして状況に応じ医師免許再取
 りこと。また金に困っているか表世界で真っ当たりに抵抗が強い者。
 「それは……結構難しそうな条件ばかりですよね。綺麗じゃない」というか
 「そう思うのも無理はない。しかし日本全国津々浦々、探し出中で、鳥取の山奥に住む1人の元医者が引
 者は出てくるものだ。探し出中で、鳥取の山奥に住む1人の元医者が引
 去に交通事故で原付バイクを2人乗りしていた大学生2人を死なせてしと
 ていた」

事故は珍しいものじやない。深夜激務を終えて帰宅中、眠気に襲われ
 くるバイクとの距離感を掴み切れないまま右折を開始し接触。すぐに警
 するも助からなかつた事件。運悪く撥ね飛ばした相手が地元では名のあ

たこともあり、その後は人々の目から逃れるために無関係な地へと逃げ延びた。

「その事件から10年。医師免許の再取得は可能だが、酒に溺れる毎日を送っていた」

「そ、そんな人が……。でも、見つかったのは朗報ですが心配もあるのでは?」

「元々は派手好きで金遣いの荒い人間だった。それが狙い目だ」

「最低でも1人。出来ればあと1人。」

子供たちの健康管理を担える医者を確保しなければ。

8

それから3か月後。子供たちの手配も進み、いよいよ稼働が近づこうとしていた。

しかし最終局面、教育に関する部分で教育者たちと話を詰めなければならない。

ホワイトルームへと僅かな手荷物を持ち込み住み込みで働くことになつた研究者たちを

研究室へと集め話し合いを持つところだつた。

石田、宗谷、鈴懸、田淵の4名が全員白衣をまとい着座している。

「これからおまえたち4人には、ホワイトルーム1期生の教育を担当してもらう。直接の顔合わせはこれが初めてだがオンライン会議では何度も議論を交わし合つて貰つた。連携を取ることに支障はないと考えている」

「待ってください。確かに何度も話し合いを行いましたが、我々はその向いている方向性

も方針もまるで違います。どうやつて足並みを揃えろと言ふんですか」

年長者の宗谷がそう言つて強く意思を表明する。
石田や鈴懸に至つては、領こうともせず、自らの主義主張は間違つていないと
溢あふれた顔をしている。繰り返したオンライン会議でも同じだつたため驚きはない
延々と方向性について話し合いを続けさせたところで交わることのない連中が
「もし、主張を捻ねじ曲げて従えと言つたらどうする」

「無理です。その場合は降りさせてもらう」

即、石田はそう言つて答える。

「俺もだ。ここには俺の理想の教育を施すためだけに来た。それが実行でき
く気はないな」

それは鈴懸も同じ。譲ろうという思いなど最初から頭の片隅にすら置い
「綾小路さんに対してその失礼な態度はなんですか。準備の段階で相応

「綾小路さんに対する失礼な態度はなんですか。準備の段階で相応

は知ってるんですよ」

失礼に当たる態度なのはその通りで、教育論に関してど素人の鴨川を窘める。

のだろう。しかし俺はそんな鴨川を窘める。

「困惑させるようなことを言つたが早合点する必要はない」

用意し、今すぐに使える子供たちは全部で15名。

おん坊の名前と性別、誕生日の書かれた名刺サイズの紙を15枚裏で

そして適当にカードを混ぜるようにシャッフルし机の上に置いた。

「石田、鈴懸、宗谷。おまえたちはここから5枚ずつランダムに紙を選び手に取れ。それが各々教育し、担当する子供たちだ。一定期間教育を施せ。ホワイトルーム1期生は3つのグループを並行して育成していく。田淵には予め、おまえたち3人を平等に監視する役目として了承を得ていてる」

田淵は頷いてから、3人に對してそれぞれ一度ずつ視線を向けた。

「なるほどな。いいアイデアだ。価値觀が合わない以上それが唯一の選択だぜ」

俺が考えた結論、それはこの3人に自由に競わせるというものだった。

理念も信条も異なる天才たちに、最初から足並みを揃えろという方が無理難題だ。「しかしいつまでもとはいかん。育成期間は3年。つまり子供たちが全員3歳を迎えた段階で総合テストを行い、成績の良かつたグループを率いていた者が正式なリーダーだ」誰もが負けると思つていなかったため、不安視する要素はない。

石田も内容に満足し頷いて紙に手を伸ばしてきたため、俺は睨みつけ腕を掴む。

「な、何を!?

「いいか? 負けた後子供の素質が違うだとか、不服を申し立ててこの決定に従わないといつたふざけたことを吐けば、違約金として通帳に刻んだ3年分の金は消えると思え。それに表社会だけじゃなく裏社会でもその立場を完全に失うことになる。そのことを努々忘れるなよ?」